

1	SE	場面切り替え
2	SE	衣擦れ\シューズを擦る音
3	SE	鳥（スズメ\ムクドリ系）の鳴き声
4	一ノ瀬	……
5	一ノ瀬	「ん……」
6	一ノ瀬	「朝……」
7	一ノ瀬	「ぐい……だ、い」
8	一ノ瀬	「そうか。たしか山の中を彷徨って……それで」
9	SE	場面切り替え
10	SE	食器音（カチャ系）
11	一ノ瀬	結局何も分からないままか
12	一ノ瀬	昨日の記憶を頼りに壁の中を歩いてみたけれど、 ここがどこなのか知る手がかりは見つけられなかった
13	一ノ瀬	テレビとか新聞とか、 とにかくなにか情報を手に入ればと思ったけれど、 学生食堂だということにもその類のものは見当たらない
14	一ノ瀬	学生のほとんどは寮住まいだというし、 厳格な方針なのか、 それともともと誰も興味を示さないのか

15	一ノ瀬	たしかにテレビや新聞が無くても不思議じゃない。 実際自分の周囲でもそれらに興味を持っている人なんて……
16	一ノ瀬	人なんて……？
17	一ノ瀬	いま何か……
18	一ノ瀬	具体的には分からないけれど、何かがひっかった
19	一ノ瀬	……だめだ。何かを思い出そうとすると霞がかかったように頭の中が 真っ白になって何も考えられなくなる
20	一ノ瀬	今は考えても仕方ない、か。
21	一ノ瀬	自分が誰なのかすらわからないんだ。 ショックじゃないといえば嘘になるけれど、ここまで何も分からないと むしろ諦観の方が強い
22	一ノ瀬	「スマホでもあればすぐわかるんだろうけどな……」
23	みちる	「すまほ。」
24	一ノ瀬	「うん。いくら海外って言っても ネットさえ見ればなんとかなりそうな気が——」
25	一ノ瀬	「っ？！ うわっ！」
26	一ノ瀬	いつの間にやってきたのか。傍らに女の子が立っていた
27	みちる	「うん？ あ、隣借りるね」
28	SE	椅子を引く音
29	SE	食器音

30 一ノ瀬  
白いブラウスに青いチェックのスカート。  
緩やかな曲線を描いた胸元でリボンタイが揺れている。

31 一ノ瀬  
「せい……ふく？」

32 一ノ瀬  
それは学校の制服だった。  
デザインは見たことのないもので、どこものかは分らないけれど、  
昨日来てから初めての見慣れた光景に驚いて言葉が出ない。  
そんなこちらの様子を見て、女の子はくすりと小さく笑みをこぼした

33 みちる  
「くすつ。なんだかまだ眠そうだね」

34 一ノ瀬  
屈託なく笑うその顔は窓から差し込んだ朝日を浴びて眩しいほどに輝いていた。聞きたいことは山ほどあるはずなのに、どれも形なることなく消えていく

35 みちる  
「すまほって、あの『スマホ』？  
もしかして持ってたりするの？  
あ、変なこと言ったらごめんね？」

36 一ノ瀬  
「い、いや、大丈夫。そう、そのスマホ。  
でも昨日から見当たらないんだ。  
たぶんどこかに落としたんだと思うけど」

37 みちる  
「そつか……残念。キミ——転入生？ 昨日先生に連れられてたよね？」

38 一ノ瀬  
「先生？」

39 みちる  
「うん。昨日の夜、弥彦先生と一緒に校舎の中とか、  
学生寮回ってたでしょう？」

40 一ノ瀬  
「弥彦先生っていうんだ。そういえば名前聞いていなかった」

41 みちる  
「うーん、先生抜けてるところあるからなあ。  
『貴方は』とか、『私は』とかだけで場が成り立っちゃう顔してるから。  
色々曖昧になっちゃうんだよね」

42	一ノ瀬	「顔の問題、なのかな……」
43	みちる	「顔と、あと空気？ あなのほんとした人畜無害ですって空気に最初はみんな騙されるんだ」
44	みちる	「でも怒らせると角が生えたみたいに怖いから気を付けてね。 あの冷たい微笑みを浮かべたまま山積みの課題渡してくるんだから」
45	一ノ瀬	「そう、なんだ。たしかに、普段穏やかな先生ほど怒らせると怖いって いうのはよく聞かもしれない」
46	みちる	「——あ、ごめんねこつちの話ばかり。 えっと、私はみちる、織部（おりべ）みちるだよ。あなたは？」
47	一ノ瀬	「僕？ そういえば名前……」
48	一ノ瀬	自分が何者なのか。どうしてここにいるのか。 曖昧な記憶は霧（もや）がかかったみたいにはっきりしない。 だけど不思議と、それだけは自然と口が動いてくれた
49	一ノ瀬	「僕は一ノ瀬（いちのせ）。一ノ瀬 拓斗（たくと）だよ」
50	みちる	「一ノ瀬君かー。じゃあ——タク、だね」
51	一ノ瀬	「そこなの？」
52	みちる	「うん、よろしくね、タク」
53	一ノ瀬	織部さんは再び満面の笑みを咲かせる。 いきなりあだ名をつけられてしまった。 けど、そう口にした織部さんのなぜだか嬉しそうな様子を見ると なんだかただす気にはなれない
54	一ノ瀬	「あ、うん。よろしくお願いします。織部、さん」

55	みちる	「あーわざとでしょ、そんな呼び方。 みちる、でいいよ。たぶん同年くらいだよね」
56	一ノ瀬	「いやでも——分かったよ。えっと、みちる、さん」
57	みちる	「まーだなんか堅いなー。まあ、おいおい慣れていけばいいよね」
58		
59	みちる	「それでタクはこれからどうするの？」
60	一ノ瀬	「どうするって言われても——弥彦、先生に呼ばれてはいるけれど好きな時間に来ていいって話だったし」
61	みちる	「そう、なんだ。じゃあさ、私が案内してあげよっか？ トリウィウム、初めてなんでしょう？」
62	一ノ瀬	「ういの？」
63	みちる	「うん。もともと私も見て回ろうと思っていたところだから。ほら」
64	SE	鍵束
65	一ノ瀬	「鍵？ ずいぶん多いけど」
66	みちる	「これはね、トリウィウムの教室全部の鍵なんだよ。 これがあればどこにでも……まあ、一部は除くんだけど——とにかく、色々なところに入り放題ってわけ」
67	みちる	「あ、もちろん勝手に盗って（とって）きたわけじゃないよ。 先生に今日一日だけって特別に借りてきたんだ」
68	一ノ瀬	「ああ、それで」
69	一ノ瀬	「みちるさん……みちるが僕のところに来た理由が分かった気がするよ」

70	みちる	「そうそう。先生からもトリウィウムの先輩として色々教えてあげて欲しいって言われて」
71	一ノ瀬	「ありがとう、じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな」
72	一ノ瀬	返答に満足したのか、みちるも食事に集中し始める。 食堂のメニューや開放されている時間、作ってくれるおばちゃん達のこと。他愛のない話を続けながら、みちるはころころと笑う。
73	一ノ瀬	分らないことが少しずつ分かるようになっていく感覚。 これならなんとかなるかもしれない。みちるの笑顔を見ているとそんな気さえしてくる
74	SE	鈴音
75	みちる	……ク。
76	SE	心音大
77	一ノ瀬	「ccc! ぐっ……」
78	一ノ瀬	「今のは……」
79	みちる	「……タク? 大丈夫、タク?! 顔が真っ青だよ!」
80	一ノ瀬	「っ、ごめん。大丈夫、ちょっと喉に詰まりそうになっただけだから」
81		
82	みちる	「本当に大丈夫? すごく辛そうだったけど……。 昨日来たばかりなんだし、もし体調悪いなら案内はまた今度でも」
83	一ノ瀬	「……大丈夫、もう落ち着いた。昨日もぐっすり眠れたし問題ないと思う」
84	みちる	「なら、いいんだけど」

85	一ノ瀬	「それより早く行こう。実は結構楽しみなんだ」
86	みちる	「タクがそれでいいなら——うん、そうだね。任せて、新学期が始まる前にタクも一人で出歩けるようにならないといけないしね」
87	一ノ瀬	「子供じゃないんだけどな」
88	一ノ瀬	とりあえず余計な心配をかけずに済んだみたいだ。でも、今は……
89	一ノ瀬	記憶の片隅にひとかけらだけ残っている声。 あの時間こえたのはみちるの？
90	一ノ瀬	いや、そんなはずは
91	一ノ瀬	でもどうしてだろう
92	一ノ瀬	みちると会うのは初めてなはずなのに、 前にもこうして話していたことがあったような
93	一ノ瀬	「ねえ、みちる」
94	みちる	「うん？ なに？」
95	一ノ瀬	返却口にトレイを返し、中庭へ出ようとしていたみちるの背中に 声をかける
96	一ノ瀬	「ああ、いや。やっぱり、なんでもない。大したことじゃないから」
97	みちる	「えー。そんな言われ方したら余計に気になっちゃうと思うけど？」
98	一ノ瀬	「……。前にも、みちるとこんな風に話をしていたような、 そんな気がしたんだ。そんなはずないのに」
99	みちる	「タク……」

100	みちる	「それってあれかな。これは運命の出会いだーってやつ。ひよっとして、私口説かれてる？」
101	一ノ瀬	「い、いやそんなつもりはっ。ごめん、忘れて」
102	みちる	「ふふ、ごめんごめん。実は弥彦先生からも言われてたんだ。ちよっと記憶が混乱しているかもって」
103	一ノ瀬	「混乱、なのかな」
104	一ノ瀬	混乱というより、欠如、欠落している方が近い気がする。ある一点からふつりと途切れて真っ黒になっているような
105	みちる	「でも大丈夫！」
106	みちる	「今は思い出せなくても、何かの拍子に思い出せるかもしれないし、それに」
107	一ノ瀬	「それに？」
108	みちる	「タクと私は同年だし。一緒に卒業するまで、私がタクを守ってあげるからっ」
109	一ノ瀬	それはやっぱり、どこまでも明るい笑顔で。怖いことなんて何もない、そう思わせてくれるあたたかさがあつて
110	一ノ瀬	突き抜けるような青空の下、まっすぐに咲き満ちた向日葵のような眩しさに溢れていた
111	一ノ瀬	「うん？ 同年？」
112	みちる	「そうだよ。冬が過ぎて、春になったら、キミもトリウイウムの一員！あれ、違った？ 弥彦先生がそう言ってたけど？」
113	一ノ瀬	「全く聞いていないというか、いきなり過ぎるというか……」



114 みちる

「くすつ、そうなんだ。でも私もとても良いことだと思うけどな。キミはこれからのことを考える必要があるけれど、それにはどうしても必要なこと——」

115 みちる

「何を知っていて、何を知らないか。  
トリウィウムはそれを探すにはきつと一番だよ」

116 みちる

「キミが探すその道がどこにあるのか、私も一緒に探すから。だから——」

117 一ノ瀬

ようこそトリウィウムへ。そう言って彼女は再び笑う。  
中庭から流れ込む風は春がそう遠くないことを示していた